



3面スクリーンで渋沢栄一(中央)の生涯を描く「未来への挑戦〜渋沢栄一物語〜」(1988年)

博覧会で展示後破棄 散逸危機

「映像遺産」次代へ

国内初福岡市に保存推進団体

先端技術を駆使して国際博覧会などのために制作された「展示映像」の保存を推進する団体が福岡市に誕生した。展示映像の上映には特殊なスクリーンや音響設備が必要で、特定期間に限定された場所で公開されるため、作品は上映後に破棄されることが多く、散逸の危機にある。団体を立ち上げた九州大名誉教授の脇山真治さん(67)は「最高水準のスタッフが最新技術で挑戦的な作品を試みる事例もあり、映像遺産として貴重」と話す。組織的な保存活動は国内初という。

脇山さんは九州大芸術工学部画像設計学科の教授だった2009年に展示映像の調査を開始。個人や制作会社が所有するフィルムをデジタル化するなどし、博覧会用の作品を中心にこれまで70件以上を保存した。19年に九大を



展示映像総合アーカイブセンターを設立し代表理事に就いた脇山真治さん

「最新技術で挑戦的な作品」

退職後、活動を継承する団体の準備を進め、一般社団法人「展示映像総合アーカイブセンター」を4月に設立した。調査を通じ、貴重な作品が失われるのを防いだ。13年には、日本万国博覧会(1970年)の日本館で上映された「日本と日本人」の所在不明フィルムを発見。8面から成る幅48センチの巨画面で上映された同作は、市川崑さん(監督)や谷川俊太郎さん(脚本)ら名だたる表現者が制作に加わっていた。さいたま博覧会(88年)の「未来への挑戦〜渋沢栄一物語〜」もフィルムは現存せず、唯一残ったビデオテープは脇山さんが保管している。3面のスクリーンで再現ドラマや資料映像を切り替えながら映す実験的な作品だ。

脇山さんによると、博覧会など単発の大規模イベント用に制作された展示映像はイベント期間が終わると会場ごと撤去され、いつしか行方不明となる。近年アーカイブ化が進む映画作品ほどには保存の意識も関係者に浸透していない。センターの保存対象はスポーツイベントやエンターテインメント施設、コンサートの演出映像も含む。法人の代表理事に就いた脇山さんは「次世代の映像制作者や研究者が活用できる形で残していきたい」と意気込む。

(諏訪部真)